
ハチャメチャ!?ギャツビーワールド

ギャツビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハチャメチャ！？ギャツビーワールド

【Nコード】

N7308Z

【作者名】

ギャツビー

【あらすじ】

スバルが！？土が！？悠斗か！？キャラ崩壊がデフォなカオスワールドが炸裂！駄文作者ギャツビーの小説に登場するキャラたちが色んな企画に挑戦していく意味不明な物語が今始まる！

FILE 1 “クリスマス、X・mas、Christmas” (前書き)

突発的な思いつきです(笑)

無理矢理クリスマスに間に合わせたのでクオリティは低いですが…

…気にせずレッツゴーです!

良く腰かけている少年と少女。シューティングスターロックマンと星河スバルと、ハープ・ノートこと響ミソラだ。余談だが、アイドルである彼女はこの日を開けるのに相当苦労したらしい。

「星……綺麗だね……」

ミソラが満点に輝く星空を見上げながらポツリと呟いた。そう。今日は空に雲が全く見当たらない程の快晴だった。更に空気も澄んでいて、天体観測にこの上なく適していると言えるだろう。

「そうだね……ほらミソラちゃん、あれが冬の大三角だよ。プロキオンとシリウスとベテルギウスの3つの星をつないだ星座なんだ」

スバルはナチュラルに得意分野である宇宙や星の話をしつこすぎない程度に織り混ぜる。

「ふええ〜。ホワイトクリスマスもロマンチックだけど、こういうのもいいね」

ふと、スバルの視界に星空を見つめるミソラの横顔が映る。咄嗟に夜空に視線を戻すが、時すでに遅し。赤面してしまっている彼に気づいてしまったようだ。

「どうしたのスバル君？」

「なっ……何でもないよ？ あははは……」

一応無理やりに笑ってはみたが、それで彼女を誤魔化せる確率はかなり低いだろう。

『どうしたんだスバル？ 顔真っ赤だぜ？』

ここで現れたのがガッツ代表こと我らがウォーロック。タイミングバッチリである。

「わっ！？ ちょっとロック、いきなり出てこないでよ……」

『そうね。ちょっとウォーロック。こっちへいこうかしら？』

ウォーロックにつられてミソラのハンターから出てきたのはハーブだ。

『はあ？ なんだだ』

『いくわよ？』

『はい』

元FM星の誇り高き戦士の敗北は早かった。

そしてウォーロックはハーブに連れ去られながらも相棒であるスバルに必死に声にならない声で訴えかけようとしていたが、その当の星河スバルは彼に向かってハンカチを振っていた。

（オンドルルラギタンディスクー！？）

そしてとうとうウォーロックの叫びはスバルに届くことはなかったと言っ……。

ツカサ「めでたしめでたし」

ウオ『めでたくねえええええええ！？』

シドウ「そんなことより続きだ続き！」

翔（楽しそうだなによりです）

士「わあっ たわあっ た…」

ウオーロックもいなくなり、再び静かになつた展望台。星が満天に輝く空の下、ミソラは不意に笑つた。

「フフツ……ねえスバル君。ロック君とはいつもあんな感じなの？」

「うーん…大体あんな感じじゃない？」

ミソラにとつてのウオーロックのイメージとは屈強な戦士だ。たった一人でFM星を裏切り、地球に降り立ちスバルと一緒に戦つた心強い戦士。こう言つては本人に失礼かも知れないが、正直今の光景とはギャップがあつた。

「へええ……なんかロック君の新しい一面みちやつた」

「そうだよね。ミソラちゃんロックと話す機会あんまりなかったもんね」

「うん。そつだね」

……会話が途切れてしまった。なんだか気まずい空気が辺りを覆う。

(……なんかもまずい気がする……)

「あのっ…スバル君！」

「えっあ…ん？ど…どうしたの？」

唐突なミソラの声になぜかスバルは無駄にテンパってしまう。

「私さ…今日ずっと言おうと思ってたんだ…」

「え？ え？ え？」

スバルにしたって鈍感な部類には入っているがここまで言われて何も感じないほどの鈍感大王ではないだろう。気づかなかつたら気づかなかつたらで熱斗並みの鈍感という不名誉な立ち位置に立たされてしまうことが確定する。

「今までスバル君には助けられればなしで、感謝してもしきれないぐらいなんだけど…それでもこの言葉だけは言っておこうと思うの」

ミソラは何回か深呼吸をしたあと、胸に手を当ててから言葉を吐かないだ。

「ありがとう…そして」

『ハーブ！ おまつ！？ いくらなんでもそれは洒落に……ぎゃあ
あああああ！！？』

突如として聞こえてきた声の正体は言わずとも分かる。ウォーロ
ックだ。また見事にやってくれたと、もはや称賛したいぐらいのグ
ッドタイミングである。

顔を真っ赤にしていたスバルとミソラはキョトンとお互いの顔を
見た後、思いつきり笑った。それこそ涙が出るぐらいまで……ずっと……

「それで、何て言おうとしたの？」

少し落ち着いた後に、スバルはミソラにいう。

「んとね、これからもよろしくね？」

そしてミソラは少し考えた後、微笑みながらそう言った。

「うん。よろしく」

二人の手が、重なった。

ありがとう。大好きだよ、スバル君

ソロ「どうも。リア充撲滅委員会会長のソロです」

ツカサ「あ、それ僕も入っていいかな？」

悠斗「せめてツツコめよ!？」

翔「すごいナチュラルにやってるけど実際色々おかしいからね!？」

士「さて次はつと……」

スバル「あれ？僕どうしてたんだっけ？」 該当者は記憶消去

シドウ「こええよ」

悠斗「方向性が見えてこねえ……」

士「次のリア充どもは、『暁シドウ×クインティア』だ」

ソロ「暁シドウ……貴様を殺す!」

シドウ「……来るなら来い! すべてを破壊してやる……」

士「セリフパクんな!」

「シドウ、少しは休んだら?」

「まだまだ、士たちがいつ戻ってきてても恥ずかしくないようにしとかなないとな」

サテラポリスのエース、暁シドウはクリスマスなど関係無しに仕事をしていた。因みに今の時間軸は彼が言った通り、士たちがこの世界から去った後だ。

「でも、痛み止射って病院を抜け出してまですることでは無いわよね」

クインティアの言葉を聞いた瞬間、シドウの肩がビクッと動く。

「……ティア、誰からそれを？」

恐る恐るシドウは訪ねる。しかし答えたのはクインティアではなく彼女のウィザードだった。

『キャハハハ！ コーヴアスが面白がって言ってたわよ？』

そう。彼は病院を抜け出す一部始終をジャックに見られていたのだ。ジャックの口止めには成功したようだが流石にコーヴアスまでは無理だったようだ。と言うより、コーヴアスを口止めなど聞くわけがない。

「はあ……」

シドウは溜め息をつきながらポケットから何かを取り出す。言わずとも分かるであろう。そう『うまい棒』だ。これでは溜め息をつきたいのはクインティアの方だ。

「ねえシドウ、少しは自分のことも心配してよ……いつだってあなたは他人を優先するあまりに自分を疎かにする。キングから離反した時も、ジョーカーの自爆を食い止めたときも……」

当たり前すぎる光景なのか、もはやうまい棒の存在には微塵も触れないクインティア。代わりに自分の思いの丈を彼にぶつけた。

「……ごめんな……俺、バカだから自分の体を動かすやり方しか知らないんだ」

さすがのシドウもおちやらけた雰囲気をつ込め、少し顔を伏せながら謝罪する。

「でも、貴方が傷つければ悲しむ人が沢山いることを忘れないで」

「……わかった」

クインティアの言葉に流石のシドウも押し黙るしかなかった。代わりに彼は、そっと彼女を抱きしめる。彼女は少し驚いた後、彼を受け入れ、二つの唇が……重なった。

ソロ「リア充は全て消し去ってやる!」

「『ジエミニ・サンダー!』」

『FINAL ATTACK RIDE…DE DE DE DE DE』

C A D E !」

ソロ「ぎゃあああああ!?!」

士「そろそろアイツがうざくなってきた」

ツカサ「奇遇ですね、僕もですよ」

翔「あれ？ 俺があいつにカブトゼクターぶつけたのよりよっぽど酷くね？」

スバル「ギャグだから」

悠斗「これもこええよ」

シドウ「……あれ、何でソロあそこで倒れてんの？」

士「さあな」

ソロ「おのれディケイドオオオオオオオ！」

翔「生きてるし!?!」

スバル「そのまま死んでた方がキャラを保つ為にはよかったんじゃないかなあ……」

ツカサ「キャラを保つなんて概念は存在しないよ？」

士「キャラすら破壊してやるよ」

悠斗「しなくていいです。次行ってください次」

士「仕方ねえな……次は……」

ツカサ「あれ？ もう無いよ？」

スバル「ええ！？」

悠斗「二組だけ……？」

翔「何でだろ……」

士「ちょっと待て、紙になんか書いてある」

ツカサ「門矢さん、ちょっと見せてくれませんか？」

士「待て、今読んでやる……“クリスマスはイエス・キリストの誕生日を静かに祝う日だ。決してリア充どもが戯れる日ではない。てかりア充爆発しろ”……作者ああああ！？」

悠斗「あいつの差し金かよ……」

翔「あの駄文野郎……どんだけだよ……」

スバル「人としてどうかと思いますけどね」

ツカサ「……………」

ソロ「作者サンキュ！」

シドウ「……状況が読めないなあ……」

上条「てか俺いる意味あった？」

悠斗「ない」

上条「ひどっ！？不幸だあああああああ」

士「作者破壊してくる」

ツカサ「……………」

スバル「なんかツカサ君が静かなのが一番怖いんだけど……」

翔「奇遇だね。俺もだよ」

悠斗「“つかさ”コンビが爆発する前に終わらせた方がよくないか？」

シドウ「わりと賛成」

翔「同感っす」

スバル「あつまズイ……門矢さんとツカサ君、なんかこの辺り一帯無に返しそうなオーラ出してる……」

悠斗「そんなに俺らいじりたかったのか？」

翔「ガチであれやばいって！？ 変身！ クロックアップ！」 ラ

イダーフォームに直接変身。

シドウ「逃げた!? トランスコード!」 アシッド・エースに電
波変換

スバル「暁さん待って!」 ロックマンに電波変換。

悠斗「ちよっ!? ……ソロガード!」

ソロ「貴様っ!?!?!? ぎゃあああああ!?!」 本日二回目

何が起こったかはご想像におまかせします。

悠斗「……………良き週末を?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7308z/>

ハチャメチャ!?ギャツビーワールド

2011年12月24日07時48分発行